

明治大学 政治経済学部 「地域研究総合講座」 2011 年度

《「講師への質問」に対する回答》

7 月 4 日(月) 13:00~16:10 講座担当 地域政策プランニング 福田 志乃

2 年生の皆さん。講義の当日は、話を熱心に聴いてくれて、どうもありがとう。講演は数多くやってきましたが、大学で話題提供するのは初めてで、私にとっても、充実した時間になりました。

ところで。講座の後の感想や意見など、皆さんから提出してもらい、すべて興味深く読ませていただきました。20 人くらいの方から、講座の内容や私の考え方に対しての質問をもらったので、こうした形で回答することにしました。

まだ 2 年生… ということで、いろんなことができて、良いですね！学業やサークル、バイトやボランティア、プライベートや旅などなど。とにかく学生生活を存分に enjoy！して、たくさんのことを“経験”してくださいね。

【講座の内容に関する質問】

Q1 「積極的でない人たちを巻き込む」には、どうしたら良いか。

A: 私が現場に入る時は、「積極的でない人(=やる意志が無い人)」は基本的に巻き込まない… という手法をとります。なぜなら、「やる意志のある人」とそうでない人との想いやエネルギーの差は、プラスの結果を生みにくい。意志ある人たちの気持ちやスピードまでも削ぐからです。説得できる簡単な話ではありません。

だから、私は、現場では「人材の一本釣り」や「温度差ごとの議論のテーブル」など、かなり戦略的な“手”を使います。このあたりの上級編の話は、時間の関係上、講座ではできませんでした。

ただ、「やりたくない原因は何か」は、一人ひとり調べますね。①そもそもやる気や能力がない、②お金が無い、時間が無い、③ノウハウや経験が無い、④補助金が目当て、⑤組織のボスが認めない、⑥制度的に困難などなど。③⑤⑥の「やりたい気持ちに変われそうな人」とは個々に話し、一緒に問題を取り除きながら進みます。①②④のケースには、先方も望んでいないでしょうし、あえて深入りしません。

Q2 国の行政と地域とは、別々の意見で考えるべきか。

A: 本来は、別々であって良いワケがなく、一緒に、地域に着地して行動すべきです。しかし、制度的あるいは構造的に、別々、バラバラ… になってしまう現実も多々。実際は、それを『結ぶコンセプト』が“地域”だと思っていますし、また、それこそが「地方分権」の目指すところだと思います。でも、2 年でローテーションする国の人事もあり、国の人は地域に腰を据えられない。一方の地域は地域で、国に「お金頼み」になってしまう。

あと、国と県と市町村のヨコワリよりも、それぞれに存在するタテワリのほうが、地域を細切れにしています。「トータル」とか「総合的」とか言うものの、「ヨコ&タテを調整する地域のプロデューサー的な人材がいらない」というのが、私がいちばん変えたかったことなのですが…。その考えが、講義でお話したような「現場での葛藤」になってきたわけです。もう少し、時間(年月)がかかるのでしょうか…

Q3 「提携」と「協働」の違いを、具体的に教えてほしい。

A: 「連携」「協働」は、ブームと感じています。ちょっと理念的(キレイ事)かな?… 私は、使いたくない言葉だし、私の現場では使えないと思っています(多くの人が使っているので、私への批判も出そうですが…)。

たとえば、産学官連携とか農商連携とは 20 年前から言われていますが、それは「必要性論」「べき論」であって、現実には踏み出せていないことが多い。さらに具体的に説明するなら、コンサルの私と、質問をくれた学生の S さんとの間では、「これからは協働(連携)して、地域のことで考えてみようね!」と簡単に言えますね。じゃあ、一体何を、どう協働(連携)するかが分からなくても、イメージでそう言ってしまう。

ですが、「提携」となると、話が変わってきます。「私と S さんとが、一緒に提携しよう!」なんて、何を言っているのか、逆に分からないでしょう? 具体的に、私の持つ「プロのノウハウ」と S さんの持つ「学生の情報網」とを利用して… といったように、それぞれの明確な切り札がないと、「提携」という言葉は使えないのです。

言葉を変えて説明するなら、「提携」は、具体策(あるいは目的語)がないと使えない。事業提携とかスキル提携とか、本気でやろうとするコトの対象が見えないと、イメージで使える言葉ではないとの考えです。

Q4 地域の調査・分析とは、具体的に、どのように、どんなことを調べるのか。

A: 申し訳ないですが、私の場合は膨大な作業量と工程を踏むので、この紙面ではお答えできません。自治体の職員さん向けの講演で、数時間かけて話す内容なんですね。たとえば、「統計」とか「現地調査」… というだけでも、それぞれに膨大。また、実際の現場現場のレベルによっても、調査方法を変更しています。

ちなみに、基礎的な調査方法を一通り覚えるのに数年。自分の独自のスキルとして加工し、(机上のレポートでなく、)現場で使いこなせるようにブラッシュアップするまでには、10 数年は考えたほうが良いかも。

Q5 今回の例に挙げた以外の地域の政策例などがあれば教えてほしい。

A: ごめんなさい。申し訳ないですが、これも紙面ではお答えが難しいです。「どこの地域(自治体)が」ということよりも、「その地域が、何をもって」ということのほうが重要で、本質的な地域の政策を生み出すまでの過程は、紙面で簡単に説明できないからです。

また、私自身が好事例と直感し、取材をもとに自らが事例として世に紹介する活動もしてきましたが、その場合も徹底的に調べているし、独自の判断基準を説明しているので、事例の扱いにはとても慎重なんです。

【福田のコンサルとしての考え方 & 生き方(?)に関する質問】

Q6 (大変な中を)邁進していく原点はどこにあるのか。女性蔑視を跳ね返さんとする意欲だけでは、考えられない。また、大きな仕事を任された時の重圧や気負いを、どのように推進力に変えてきたか。

A: 一言に「地域を旅したり、考えたりすることが好きだから」。社会や組織の構造としてイヤなことがあっても、「地域そのもの(自然や文化など)」に触れたり考えたりしている時を、イヤと感じたことは一度もないのです。それと、「女性の社会的立場」については、実は興味が無かった(そんなこと考える時間のほうが勿体ない)。

私個人として、地域を見、考え、創る仕事がしてみたかった… でも、現実には厳しかった。ある時、「ココロが折れた時、闘う相手は自分自身だった」ことに気がつきました。それは、進学や就職や独立や「仕事か家庭に入るか」といった岐路には、何度も立たされてきたけれど、すべて「自分自身が選択」してきたからです。

イヤなことから逃げていたら、好きなこと&やりたいことを選択してきた“ワガママな自身”を、自らが否定することになるでしょう? 「自由と責任は表裏。辞める時は、自分に説明ができないと…」と考えました。

また、「仕事の苦楽の経験」は10年、20年と重なっていきます。ですから、小笠原の時など的大変な状況下でも、「やれる(=地域を動かせる、変えられる)」という直感や自信はありました。

補足ですが、学生時代もクラブの長とか学年の編集長とかやっていたし…。その意味、“使命感”“責任感”は強いほうかも知れません。加えて、「考える前に、走っている性格」もあり、周囲の眼に左右されない(正確には、「やる」と覚悟したら、周囲を気にしているようではダメ!と思う)ので、重圧は感じにくいです。

要は、結果を出すこと。その分、取り組みに対する集中力は、自分でも凄いと思う。

Q7 借金をしてでも、「自分のしたいことをすること」は大事か。

A: 「いけいけ、ドンドン!」の私が答えるのですから、答はもちろん、「大事です」。

たとえば、もし、地域や自治体の若手の方々が「やりたいけど、やれない(=分からない、上司がダメ出し)…」と悩んでいるのなら、私は必ず、一緒に考えたり、問題解決の後押しをしたりしてきました。「やりたい」という気持ちこそ“宝の原石”と考えていますし、それが成果を出せずに終わっても、アラサーまでならば許されるし、取り返しもつくでしょう。

むしろ、手探りで行動した勇気と経験は、『自分の引き出し』となって、将来、思いがけないところでの判断力や構想力になって現れるかも知れません。私自身、現場では、過去から積み上がった経験則による『引き出し』が、場面場面で瞬時に開閉しているのを実感しています。机上の知識は、ほとんど役に立たないかな。今となれば、“遠回り”しながら拾ってきた石が、宝モノ。

ただし、行動する際に大切なのは、「どんな結果であれ、責任を人に押しつけないこと」と「自分で覚悟した選択なのだから、折れても、逆風でも、トコトンやってみること(=夢は、簡単に諦めないこと)」…、かしら。

Q8 将来の仕事として関心があるので、どのような困難があったか、もっと聞く機会がほしい。

A: 関心を持ってくれて、どうもありがとう。お話した内容は、20 数年分のたった数コマでしたが、「地域の生き方は、一人ひとりの生き方と同じ」というコメントにも込めたように、山あり谷あり。涙も笑いも、逆風も追い風も必ずあると、私は経験的に思っています。どんな仕事を選択されるにも、「社会では困難があっても当たり前」

と思って、困難から逃げ回らず、“前向きに”そして“誠意をもって”、目の前の困難と向き合ってください。地域に対する誠意こそが、共感や感動を呼び、困難を喜びに変えてくれることにもなると思う。

Q9 どのような勉強をすれば、地域のプランニングやコーディネートといった仕事につけるか。また、他にも「地域のためにできること」があったら教えてほしい。

A: 私の場合は、そういう仕事があったわけではなく、都市・地域計画の技術職だった私が、手探りでそういう仕事の仕方を模索してきて、「地域経営論」として発表した 2000 年には、かなり反響を呼びました。ですから、時代背景もあって、私は書物で勉強したことはありません。ただ、旅が好きで好きで…。大学 4 年に 100 万円の借金をつくってまで、一眼レフのカメラを肩に、欧州の街や建築や文化に触れに行きました。その後も 20 カ国、国内では 300 以上の地域を訪れました。ローカル列車や路線バスでの移動も、自分で企画。結果的に、「地域をみる(＝感じ取る)自身の視点や感性、分析力や構想力」がついたのかも知れません。

ホームページにあるように、多くの記事や論文も書いてますが、メディアから「独自の、現場をえぐる視点」と評された時は、ちょっと嬉しかったかな…。

それと、「地域のためにやれること」は、“すべての仕事(業界)”の中で見つかると思う。肝心なのは、自分でアンテナを張っていること。(儲かるか、儲からないかは別ですが…)

個人的には、20 歳代には、旅やアート(美術&文化&建築&都市)の本を買い込み、読みふけりました。仕事での困難に多く直面してきた 30 歳代になって、「地方分権」や「地方自治」「財政」の本を読みあさり、「自身の現場での問題点は、何に起因するのか」を懸命に考えました。決して、知識を得るためでなく、自身の『苦しい現場』の原因探しが目的でした。松下圭一先生、新藤宗幸先生、西尾勝先生、五十嵐敬喜先生の書からは、「自身の考え方や手法は、間違っていなかった」と、強く背中を押された感じがしました。

Q10 このような講義を、大学以外でもやっているのかを知りたい。

A: ホームページにもあるように、私自身は、国や自治体から直接のご依頼を受けて、数多くやってきました(10 年間で 100 近く)が、どこかの機関等で、このようなテーマで… となると、分かりません。ごめんなさい！

Q11 女性の少ない環境に飛び込んで、具体的にどのようなことが一番つらかったか。

A: そもそも、「女性の社会的立場ウンヌン」という切り口には、私は興味がなかったの(＝地域を考えたいから、この業界&職場に居るんじゃない！)、周囲には男女差を言う人もいましたが、気になりませんでした。

…というより、おめでたく生意気！だったかも。20 歳代前半のある日、「女性としての視点では？」と聞かれた時に、「女性の視点？もしかしたら、私、男性よりオトコっぽいこと言うかも。要は、どんな本を読んで、どんな人と話して、どんな体験をしたか、でしょ？」などと答えました。…だって、旅好きでフラフラしていました。

出張もダメ、試験の受験もダメとあっても、結局は自らが動いて変えてきました。それは苦ではなかったです。(社会のしきたりと諦めて我慢することのほうが、私には辛かったんだと、今となっては思う。)

Q12 地域政策プランニングの代表をしていて、大変だったことはあるか。

A: 基本はフリーで、個人の名前で仕事をしていますから、実は、失敗は許されない。もし、失敗(＝成果が出せない、問題を起こした、アウトプットのレベルが低い… など)をしたなら、業界全体のブラックリストに載り、コンサル人生を辞めることにもなるでしょう。そのくらい、フリーは厳しいものです。ですから、年末年始も土日曜日も無く、24 時間、関わっている地域のことを考えている年月が続いていました。

ですが、前述したように、「地域を考えることが好き」なので、仕事というより、好きなことの延長でしたから、休みが無いことは苦にはならなかった。名前一本で仕事するリスクの分、発言もアウトプットも任されているので、やり甲斐は数倍に感じていたかも知れません。(それと、趣味時間への切り替えは得意！)

大変なことと言えば、私は、現場大好きな、職人的な技術屋。なのに、きっちりとした事務ワーク、経理、秘書的な整理整頓までやるハメになったことでしょうか…。これには、泣きたい！

Q13 もっとも達成感を感じたことはあるか。

A: 一つひとつの現場で、人ひとりと、心からつながった(＝やれるね！となった)時。あるいは、いろいろな現場で苦勞してきた人たち(国、自治体、民間など)と本音で話し、「経験」という部分で共感をし合えた時。

あと、数万字に及ぶ記事や単行本などの「作品」を、いろいろな関係者と共に仕上げた時。

そうした方々との出逢いは、「私の人生の宝モノ」となっています。

Q14 この仕事をしていて嬉しかったこと？地域ごとにお世話になった人との親交は、今でもあるか。

A: 嬉しかったことは、上記の問いに同じ。地域ごとの親交については、あるところ、ないところ、様々です。

親交が途切れた理由は、プロジェクトが終わった後の数年間はいろいろ連絡し合っても、私も毎年、多くの現場やクライアントを抱えて、年末年始も土日もない忙しさだったので…。また、5年10年経つと、地域自体もその人も代わっていきますし、いろいろな方が地域に入っていきますから、通っていないと忘れられるものです。ファンクラブとかにも入っていましたが、これも関わる地域が多い分、数ばかりが増えるので、すべてから退会しました。

私も一つの地域には数年間、プロのコンサルとして入っており、こちらは大変なワークや重責を担います。ですから、「仕事かプライベートか」は、基本的には分けて考えています。その中でも、つきあう人とはつきあい続けている… ということでしょうか。

Q15 日本社会は、男女平等と考えるか。

A: おそらく、男女、老若など、いろいろな側面で課題は多いと感じます。ですが、前述したように、私は個人的には、その問題には関心が薄いのです。職業人として、人として、どうあるかは、「大変だけれど、個人でも変えられる」と、経験的に思っているからです。

好きなこと、やりたいことの強い想いの前では、理論上や制度上の“不平等”など吹っ飛ばせると思う。

Q16 地域戦略に関する良い本を知りたい。今、いちばん関心のある地域はどこか。

A: 申し訳ないですが、私が読みふけた本については、前述の質問でお答えしたとおりです(Q9)。私自身は2000年3月に、このテーマで大型連載を書きました。ですが、この講演テーマとしては、ここ数年で自治体や議会からの要望が増えてきたので、「やっと、そういう時代になったのか」と感じています。その意味で、視点や考え方として参考とした本は、私にはないのです。

関心のある地域は……。海外、日本… たくさんあります。気が多くて、選べません！大きな(広義の)地域の中で、個々の小さな地域や生活や文化を眺めるのが、私の癖、ということであるかも…

【その他】

Q17 脱ダムをしていくとなると、発電手段としてはどのようなものがあるか。

A: 申し訳ないですが、発電技術に関する専門でないので、回答は控えます。

ただ、ダム整備ということでは、水力発電が目的のもの、利水(工業や生活用)が目的のもの、治水が目的のものなど、いろいろな目的があります。私が地域でダムと関わる場合は、治水目的(その安全性(技術論)、住民に向けた危機管理、地域振興としての二次的活用など)ばかりで、『脱ダム』は治水系のダムが対象となっていることが多いです。

Q18 ベーシックインカムは、実現できると思うか。

A: 申し訳ないですが、こちらも専門ではなく、具体的な策を動かしていないですし、自身の想像で(=自身の明確な分析や判断根拠もなく)可否を言うことは控えたいです。すみません。

以 上。